北京滞在記 ～IT 社会に猛進する中国～

眞田 晃 〔(一社)海外電力調査会北京事務所〕

1. はじめに

筆者は 1990 年代はじめの上海、世紀の変わり目の北京に続き、2016 年 7 月から北京で 3 度目の中国駐在勤務をしている。上海では改革開放の波に乗る経済成長、次の北京では電気事業が国営から脱皮する大胆な体制改革を目の当たりにしてきたが、今回の駐在では急速に進む IT 社会を日々実感している。本稿では、2020 年初頭からのコロナ禍のなかで一層加速してきている中国の IT 社会化の一断面を駐在員の目から紹介する。

2. 急速に進む IT 社会化

筆者が北京の日常生活で現金を手にするのが無くなって久しい。2019 年秋に一部の人民元紙幣のデザインが更新されたが、それを知ったのは何か月も後のことだった。

航空便、高速鉄道に加え在来線の予約・決済はスマホ上のアプリで完結する。かつては無秩序かつ喧騒を極める人混みで中国のカオスを代表するといわれた駅の有人出札窓口も今では閑散としている。搭乗・乗車も完全チケットレスとなっていて、空港・駅では、中国市民は国が発給する IC チップ付きのカード型身分証のタッチ、外国人はパスポートを読み取り装置にかけるだけで OK となっている。

加えてコロナ禍以降、本人の健康状況に関する記録を一元的に管理する公的なスマホアプリ、すなわち至近 2 週間の滞在先、ワクチン接種状況、PCR 検査結果などを表示する“健康宝”が中国国内の通行手形となっている。

昨年 4 月下旬、3 か月にわたる“封鎖”が解かれた武漢市では、全市民に対して「武漢消費券」が配布されたが、現金や紙のチケットではなく、スマホ決済時のクーポンの形で提供されている。市民側からの給付申請、本人確認といった手続きは一切不要で、武漢市当局の発表当日から使用できた。我が国の給付金と比べ、そのスピード感と行政コストの大きな隔たりを認めざるを得ない。

中国で急速に進む IT 社会化と利便性向上の例は、このほか枚挙にいとまがない。

3. IT 社会の光と陰

中国でこのような社会の IT 化が急速に浸透する背景としては、まず国民すべてに固有の番号を付した身分証が発給されていることがあげられる。航空券、鉄道切符や携帯電話の購入、銀行口座の開設、税務手続きから、果ては映画館、博物館や公園の入場予約まで、広い範囲の活動に“実名登録”と称される身分証との紐付けが求められる。

スマホ決済やタクシー配車アプリなども身分証と紐付けられているので、支払いの際にはすべて実名を晒していることとなる。これらのサービスは企業によるものだが、国

図 1 左：高速鉄道の自動改札機，中：スマホ上の滞在地の表示画面，右：天安門前の多数のカメラ（すべて筆者撮影）

家安全名目であれば当局による企業データへのアクセスが可能になるとされている。

現在の中国ではこの結果、匿名の移動手段は徒歩か現金で路線バスに乗るくらいしか残っていない。しかし携帯電話の位置情報と街中に多数設置されているカメラ映像のビッグデータから、AI による顔や歩容の認識システムにより、個人の移動情報が瞬時に把握できるといわれている。

このように中国では、個人の行動すべてが当局に把握され得る IT 社会化が進んでいると言わざるを得ない。これに対する一般市民の意識は、表向きは利便性・効率性の向上に重きを置いているように見受けられる。あからさまな警戒心を表しているのは、一部の外国籍者に限られるが、華人にその傾向が強いともいわれていることが興味深い。

また中国国内のデジタル・ディバイド問題はこれまで置き去りにされてきた感があるが、配車アプリが浸透する一方で、スマホが使えずタクシーを利用できない高齢者の問題などが徐々に認識されるようにはなっている。

筆者としては、中国に駐在している以上、好むと好まざるとにかかわらず、このような IT 社会と折り合いをつけての活動を続けていくしかない。一方、中国でのキャッシュレス化やスマホアプリですべて事足りる生活に慣れるあまり、帰国した際の逆カルチャーショックにも気を付けなければならないと自戒している。

英国の作家 J.オーウェルの 70 年前の SF 小説『1984 年』には、架空の超大国オセアニアに国民のことを何でも知っている“ビッグ・ブラザー”なる指導者が登場し、そのモデルは当時のソ連とされているが、AI による“ビッグ・ブラザー”が 21 世紀の中国に出現しようとは、泉下のオーウェル氏はどのように思っているのだろうか。

(2021 年 8 月 8 日受付)